

モノづくりの地としての  
ベトナムの魅力と進出の秘訣

## 第4回

文化面から見た  
ベトナムのモノづくり

クエスト(株) 井上 伸哉\*

\*Shinya Inoue : 取締役社長  
〒565-0853 大阪府吹田市春日 4-5-1-903  
Mail: qest\_inoue@sutv.zaq.ne.jp

1990年、クエスト株式会社設立。戦略構築、商品企画、組織改革などのコンサルティングを展開。現在、日本の中小モノづくり企業向け工業団地（ホーチミン近郊）の企画に参画、活動中。

## 独特の組み合わせ

今回は日本との比較を基本に、文化面から見たベトナムのモノづくりについて考える。

日本製の商品は、さまざまな点から世界的に評価されている。なかでも、商品の仕上り・建付けや、きめの細かいつくり込みは評価点の高い特徴である。なぜ日本のモノづくりはこういった特徴を備えることができたのだろうか。

当然いろいろな要素が絡み合い、かつ長年の経験と学習の成果であろう。ただ、モノづくりの特徴は、モノづくりに直接かかわりのある技術や技能だけから生成されるものではなく、関係する人間、背景にある文化や価値観、社会の仕組みなどからも影響を受ける。

われわれ日本人は、神と仏を組み合わせて信仰の対象にしてしまう。また衣食住で言えば、衣においては、色の濃淡と重ねる生地が絶妙に組み合わせられた十二単に美を感じとる。食では、食材の調理法だけではなく食材を盛りつける器との組み合わせに食欲をそそられる。住においては、半永久的な形を最初から建築するのではなく、改装や増しの組み合わせを当たり前と考える。ここから見えてくるのは、素材の質、形、色合いなどの巧みな組み合わせ。そこに特有のバランスを見出す考え方、組み合わせの妙である。一見不釣り合いに見えるものでも、組み合わせの工夫で美しく変身させ、ありふれたもの同士でも新たな組み合わせにより斬新さを導き出す。組み合わせの妙を知っているからこそ、日本の商品は仕上がりや建付けが素晴らしい、きめの細かいつくり込みに魅力があるのである。

組み合わせは日本のモノづくりの重要な特徴である。

誤解を恐れずに単純化すると、第1に材料の善し悪しを判断する目利き力を発揮して適当な材料を揃える。第2に、揃えた材料を最善の方法で合わせる。第3に、合わせた材料をさらに重ねながら高度化する。つまり、「揃え」、「合わせ」、「重ね」によって「組み合わせの妙」をつくり出すのが、日本のモノづくりである。昨今、何万点もの部品から構成される自動車産業において、素材メーカーや部品メーカーとセットメーカーとの擦り合わせ力が日本の自動車産業の強みだという議論があるが、これは、「組み合わせの妙」を「擦り合わせ力」という言葉で置き換えた理解ではないだろうか。

では次に、身近な題材から「揃え」、「合わせ」、「重ね」という視点でベトナムのモノづくりについて考える。

始めに民族衣装として有名なアオザイである。アオザイは、18世紀中部のフエに都をおいたグエン（阮）朝が、宮廷の制服として取り入れたのが始まりと言われている。アオザイは、腰に切り込みが入った足元まである長い上着とゆったりとしたパンタロンの組み合わせである。鮮やかな白や赤のアオザイの集団と街中で遭遇すると目を奪われる。実に清楚で美しい。素材は、絹、モスリン、ポリエステルなど。街のアオザイ店に入ると、生地の多様さに圧倒される。上着に施される刺繍も千差万別である。人気店になるには、多様な生地と刺繍を揃え、好みに合わせて色および刺繍の組み合わせを的確に提案し、購入者の身体に合致した仕立てが必要になる。アオザイの仕立てにおいては、非常にシンプルな形で「揃え」、「合わせ」、「重ね」が重要なポイントになっている。

次にベトナムの料理である。麺類と鍋の種類の多さ



路上散髪屋

には驚く。1度や2度の訪問ではとても区別できない。種類は、米、小麦、豆などからなる麺が豊富で、スープも牛、鶏、魚介、魚骨（ニョクマム）と多様である。さらに、合わせる具材としての野菜も数多い。鍋もまた、種類と同様にスープに合わせる食材も実に多様である。種類が多すぎて以前に食べた鍋をレストランで間違いなく注文するのは至難の業である。ベトナム料理は、まず多彩な食材を揃え、食材とスープの的確な合わせをつくり出し、魚骨、唐辛子、香辛料といった調味料を重ねて最高の味をつくることに醍醐味がある。まさにベトナムの料理においても、「揃え」、「合わせ」、「重ね」が重要なポイントになっている。

そしてベトナムの建築物。ホーチミンの市内や郊外を車で走っていると、見慣れた雲間気味の仏教寺院があり、そのすぐ近くにはヒンズー教のアンコールワットを思い起こさせるような寺院もある。ゴシック風のキリスト教会も目にする。また住居は、レンガづくりが大半で、同じような家が並んでいるが、古い街並に新しい住居が重なるように立っている光景も珍しくない。計画され整然と立ち並ぶ欧米の建築物とは明らかに違っている。一人ひとりが思い思いに建て替えや増改築を行うために雑然とした街並になっている。夕食時には家の前の路上が台所になり、路上散髪屋も多く見かける。ベトナムには、雑然とした日常の中に自由な組み合わせが溢れている。

アオザイ、料理、建築物の例からも推測できるように、モノづくりの組み合わせという視点から見ると、

ベトナムは歴史的に「揃え」、「合わせ」、「重ね」について創意工夫を積み重ねてきている。その意味では日本と類似点が多い。

### 秩序立った集団行動

筆者のベトナムでの経験をいくつか紹介する。

休日にホーチミンの統一会堂（旧・大統領府）へ行く機会があった。駐車場には朝からたくさんの観光バスが止まり、入り口は人でごった返していた。やっとの思いで中に入り、1階の講堂に着くと、白色のシャツを着た中学生とおぼしき子供たちが整然と席につき、説明を聞いていた。まるで日本の観光地で修学旅行生に遭遇したような錯覚に襲われた。生徒たちは、実におとなしく、行儀よく行動していた。

ホーチミンやハノイといった大都市の朝夕の通勤時間は、2輪車が溢れ返り、まさに2輪車の洪水である。2輪車同士の間隔はわずか10cmほど。しかも相当のスピードを出して走っている。運転している人を観察すると、結構目が血走って興奮しているように見えるが、われ先にと流れを乱すような運転をする人はいない。無茶な運転は事故を誘発することを皆よく知っていることもあるが、むしろ集団の声なき意志に従って、秩序正しく運転しているように見える。

ベトナムのレストランには、個室でアオザイを着た女性が給仕をしてくれるところがある。注文した料理を各自の取り皿に取り分けてくれる。ビールもなくなればすぐについてくれる。最初は、せわしない接客だ



ベトナムの通勤風景

と思った。しかし、働く女性たちを見ていると、それぞれの客の食べるスピードに合わせて手分けして給仕し、いつも手頃な量が取り皿にもられるように工夫していた。偶然かもしれないが、ベトナムの給仕におけるチームワークはなかなかたいしたもの、感心させられた。

こうした経験から感じとれることは、想定以上にベトナムの人たちは、集団行動をそつなくこなすことである。換言すると、秩序立った集団行動ができる人たちである。

モノづくりにおいては、仕事の単純化を進め、仕事を標準化し、仕事を分業するのが基本である。特に分業では、秩序立った集団行動が不可欠になる。われわれ日本人は、秩序立った集団行動としての分業が得意だったからこそ、世界的にも競争力のあるモノづくり国家をつくり上げてこられたのである。世界中を見渡すと、秩序立った集団行動がうまくできない国や民族がたくさんある。おそらくそうした国や民族がモノづくりで競争力を高めることは難しい。

ベトナム人は、文化的にも精神的にも秩序立った集団行動をうまくこなせる国民である。モノづくりにおいても、秩序立った集団行動としての分業を身につけ、競争力の高いモノづくりを実現する可能性をもっている。

### 万葉仮名とチュノム（字喃）

長い間、口語による意思疎通が日常であったわが国に大きな変革をもたらしたものは、まさにもなく中国か

らもたらされた漢字である。国としての体制が整ってきた飛鳥時代には、公式文書や歴史の記述に文字の必要性が高まってきた。また、6世紀半ばに百済から伝来したとされる仏教や仏典も、わが国の人びとの文字への欲求を高めたと推測できる。

無文字社会からの決別のため、飛鳥時代から奈良時代にかけてわが国は偉大な発明を行う。「夜久毛多都伊豆毛夜弊賀岐 都麻微途」。これは、わが国の最初の和歌と言われる「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに」の漢字による表記である。ヒトを「比登」、ハナを「波奈」と綴るのと同じ表記。つまり、日本語読みを漢字に当てはめる万葉仮名である。

万葉仮名の発明により、古事記、日本書紀という歴史書が後世に伝えられることになる。その後、万葉仮名は日本語本来の意味を表す訓読みと中国語の発音を表す音読みを生み出し、さらに紀貫之は漢字を日本語の発音に合わせて変形させる形で発明された平仮名を用いて土佐日記を書いている。また、記号などを表記するための片仮名もこの時代に発明されている。その後も公式文書は漢字だけの漢文が使用されていくが、返り点の活用などで日本語本来の文体への転換の工夫も施され、漢字と仮名の混合した日本語表記が普及していった。

そして現在では、漢字、平仮名、片仮名が混在した日本語が使用されている。言うまでもなく漢字は表意文字、平仮名と片仮名は表音文字である。表意文字と表音文字を組み合わせて使う言語は、世界の中でも日

本語が唯一と言えらるかもしれない。

この文字文化の独自性が魅力的な文化を培っている。例えば、世界的に評価の高い漫画。漫画は絵と文字の組み合わせで構成される。絵と文字を同時に読解処理しないと迅速に読み進むことはできない。ところが日本人は分らない漫画本でも短時間に苦もなく読み進めることができる。これは、表意文字としての漢字（絵）と表音文字としての仮名（文字）を日常的に使い分けしていることが関連している。おそらくアルファベットや漢字だけを使用している言語の中で育った人びとは、絵と文字を同時に素早く処理できないため、日本人ほど早く漫画を読み進めることはできないのではないだろうか。

言語によって形成される脳内ネットワークは、独特の文化を生成する大きな要素になる。26文字のアルファベットだけで表記する英語に比べ、日本語は漢字、平仮名、片仮名という3つの文字を縦横に組み合わせて表記する。一見極めて複雑な構成に見えるが、幅広い表現が可能になり、実に使い勝手のよい言葉になっている。

文字の組み合わせの自由度が日本語の最大のメリットである。組み合わせの自由度は言葉だけではなく、モノの組み合わせに対しても自由な発想を誘導する。モノづくりの創意工夫の多様さは世界に誇れる日本の強みであるが、これは3つの文字の組み合わせを発明した日本文化の賜物という解釈もできる。

われわれの先人は、中国文化である漢字を体内に取り込み、結局自らの言語の文法に合致する形で漢字を消化してきた。こうした外の文化を体内に取り込みながら自文化として消化していく処理方法は、モノづくりにおいても遺憾なく発揮され、わが国のモノづくりの本質形成に重要な役割を果たしたと推測できる。つまり日本語は、モノづくりの母でもあり、原動力でもあると考えることができる。

一方ベトナムは、無文字社会の中で漢字を受け入れ、日本と同じように漢字によって文字文化が開かれている。同時に、ベトナムの固有文字チュノム（字喃）を発明している。チュノムは、1945年に不便と非効率性という理由で漢字とともに使用が止められたが、意味と音の似た漢字を偏や旁に当てはめ、漢字と組み合わせでつくられた独自の文字である。

ベトナム語で数字の「3」は ba（バー）である。チ

ュノムでは、偏に ba の音に似ている「巴」、旁に「彡」を当てはめ、「巴彡」と表記していた。日本語の「鋼」の金偏は金属を表し旁は読みを、「洋」の偏は水を表し旁は読みを表現しているのと似ている。

現在のベトナム語は、「クオックグー（Quoc ngu、国語）」というアルファベット表記になっている。英語のアルファベットは26文字であるが、クオックグーは29文字から成り立っている。英語の F、J、W、Z は使用されず、声調によって A が3種類、D が2種類、E が2種類、O が3種類、U が2種類ある。6種類ある声調はアルファベットに独特の発音記号をつけて表記し、とてもシンプルで機能的にできている。日本語の場合、牡蠣や柿は音だけでは判別できないため、漢字に頼らざるを得ないが、ベトナム語では、こうした同音異義語を声調で識別でき、表音文字としての29のアルファベットで事足りている。

大切なことは、ベトナムにおいて漢字は中国による支配が密まった BC 111 年から 1945 年まで使用され、チュノムも 13 世紀から 1945 年まで使われていた。また、クオックグーは 17 世紀から使われ出した文字である。つまり、17 世紀から 20 世紀までベトナム人は、漢字、チュノム、クオックグーという3種類の文字を併用しながら文化を育んできたという点である。ベトナムもまた漢字と自国語との共存を受け入れ歴史を重ねてきた国である。漢字、チュノム、クオックグーの組み合わせを体内に取り込み、消化している。そして独自の言語文化を確立した国である。まさに文字文化の成り立ちや確立において、複数の文字を組み合わせで使いこなす歴史的经验をもち、歴史的にわが国と重なる点が数多く存在している。

日本やベトナムと同様に、漢字とハングルを混ぜ合わせて使用していた韓国が、電気製品、自動車、造船分野などでわが国の強大な競争相手になっている事実も、言語に始まるその母の文化とモノづくりの相互の深い関係性を示唆してくれる。複数の文字を使いこなす文化は、モノづくりに好影響を与えうるのではないだろうか。

## 稲作が培ったモノづくりの基盤

ベトナムは、北に紅河（ホンハ川）、南に九龍河（メコン川）を擁し、それぞれの大河の周辺に広がる豊かな土地を有している。そこで稲作は発展した。温暖な



気候を利用し、二毛作、三毛作も行われ、現在は輸出制限をしているが、かつてはタイに次ぐ米の輸出国であった。日本において米は命の源。ベトナムにおいても命の源泉は米である。

稲作は水利用の巧拙が収穫に結びつく。日本もベトナムも温帯・亜熱帯モンスーン地域にあり、水には恵まれているが、逆に台風や洪水といった水の脅威にさらされる宿命を背負っている。日本においては、水の脅威に対し稲作を守るために、治水、灌漑技術が発展し、それに伴い和算も整備された。稲作に付随した技術や数理的思考の発展が今日の日本のモノづくりに影響していることは疑いない事実だと考える。ベトナムにおいても、洪水は日本以上に頻繁に起こった。紅河でも九龍河でも河口近くで幾重にも支流が分かれデルタ地帯が広がる光景が、そのことを証明している。おそらくベトナムにおいても、歴史的に治水、灌漑技術は必須の生存条件となり、和算のような数理的な思考が生み出され利用されてきたと推測できる。

現在の日本で稲作は、品種改良や栽培技術の向上により、最も手間のかからない作物である。そして、兼業農家の副業として最適化している。しかし、元来稲作は栽培に手間がかかり、手間と努力の結晶が収穫としてもたらされる。春に田を耕すことから始まり、田植え、水のさめ細かい調整、雑草取り、病気予防、害虫駆除、秋の刈り取りまで、朝から晩まで精一杯働いてはじめて収穫を期待できる作物であった。稲作には、継続的な努力や時機を逸しない創意工夫が必要となる。つまり、稲作は勤勉な努力家が勝利する文化を培うことになり、同時に米を投げてくれる土地に対する愛着を強める。

日本とベトナムでは、栽培方法や栽培品種の違いはあるが、稲作という土壌で考えると歴史的に同じ感性を育んできた可能性が大いにある。稲作がもたらす勤勉な努力や土地に対する愛着は、ベトナム人にとっても大切な遺伝子の一つに違いない。

稲作農耕民族たるわれわれ日本人は「一所懸命」という価値観をもっている。1つのところで精一杯働き続けること。モノづくりに置き換えると、1つの技術や技能の習得を目指し懸命に努力することである。現代の先端技術やモノづくりにしても一所懸命はなくてはならない重要な価値観である。変化の激しい現代では、次から次へとテーマを変えながら迅速に最適を

求めることも有力な戦略に違いない。しかし、日本のモノづくりが世界的に評価されているのは、1つの技術や技能を継続的に極めていくことにより生成されるモノづくりの精度や完成度である。一所懸命という価値観の発露なくして、モノづくりの精度や完成度の実現はあり得ない。

稲は自然から豊かな恵みを甘受できる作物であるが、逆に自然災害にはとても弱い作物である。洪水、日照り、病気や害虫には苦もなくやられてしまう。だからこそ、手間を惜しまない勤勉な努力が必要になる。努力を合理的に活用するためには、自然の猛威に対して1人で立ち向かうのは非合理的であり、皆で協力し合い、助け合うことが重要である。そこから必然的に生まれてくる価値観が「相互扶助」。換言すると、信頼とチームワークを大切にしたい助け合いである。

翻ってモノづくりにしても、信頼に基づく協力関係とチームワークに基づいた目標遂行は不可欠な要素である。日本企業には、間断のないモノづくり品質の向上手法として小集団活動が根づいている。われわれ日本人は、1人で取り組むよりもチームで取り組んだ方が効率的に目標を達成できると、何の抵抗もなく考えることができる。これこそが、相互扶助を遺伝情報の一つとして体内に保持する日本人の強みである。

ベトナムにおいても、自らが生まれ育った土地への愛着は強く、一所懸命は深く根づいている。逆に土地へのこだわりが不動産バブルを生む皮肉な結果をもたらしている。また、家族が助け合いながら家計を支えるのが普通の営みであり、ベトナムでも確実に相互扶助は実践されている。稲作農耕民族として当然のことではあるが、日本人の感覚に極めて近い。

ここまで見てきたように、「独特の組合せ」、「秩序立った集団行動」、「特有の文字文化」、「一所懸命、相互扶助」といった価値観など、日本とベトナムには文化面でも多くの類似点がある。ベトナムには日本のモノづくりを学ぶ力があり、かつそこで成功する条件を有する国である。

#### 参考文献

- ・伊藤千尋：「観光コースでないベトナム」高文研（2011）
- ・松岡正剛：「日本という方法」NHKブックス（2008）
- ・改訂、アジア証券センター「はじめてのベトナム語」明日香出版社（2010）